

視覚障害教員のオンライン授業の現状と活用に関する研究

Research on the Current Status and Utilization of Online Classes for Visually Impaired Teachers

辻本 実里* 石倉 健二**
TSUJIMOTO Misato ISHIKURA Kenji

本研究では、視覚障害教員がオンライン授業を展開するにあたり、感じるメリットやデメリット、今後の課題解決に向けて行っていくべきこと等を明らかにすることを目的として、視覚障害教員4人を対象に2回の調査を行った。質問項目に従って回答内容を分類した結果、11のカテゴリーが生成された。その結果、オンライン授業では、生徒の様子の把握や機器の操作等に困難を感じているという発言がみられた。また教員のニーズは様々であるため、それを把握するために、さらに多くの事例収集、理療科や他教科の教員のニーズの把握が必要となると考えられる。加えて、同僚のサポートや自助努力のみで業務を補おうとするのではなく、視覚障害教員をサポートするサポーターの配置も今後検討していく必要があると考察された。

キーワード：視覚障害教員, オンライン授業, 生徒の様子, 機器操作, サポート教員

Key words : visually impaired teachers, online classes, state of the student, equipment operation, support teacher

I 問題と目的

1. ギガスクール構想とオンライン授業

昨今、ギガスクール構想によりICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) の活用が推進されている。このように、社会生活の中でICTを日常的に活用することが当たり前の中となる中で、社会で生きていくために必要な資質・能力を育むためには、学校の生活や学習においても日常的にICTを活用できる環境を整備し、活用していくことが不可欠である(文部科学省, 2020a)。そして1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする者を含めた多様な児童生徒たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育環境を実現することが必要である。

それに加えて、さらに新型コロナウイルスの流行も加わったことで、状況が大きく変化し、オンライン授業を行う学校も多くなった。この新型コロナウイルス感染症については、長期的な対応が求められることが見込まれるところである。こうした状況の中で、持続的に児童生徒等の教育を受ける権利を保障していくため、学校における感染およびその拡大のリスクを可能な限り低減した上で学校運営を継続していく必要があり、また特に、一定の期間、児童生徒がやむを得ず学校に登校できない場合などには、例えば同時双方向型のウェブ会議システムを活用するなどして、指導計画等を踏まえた教師による学習指導と学習把握を行うことが重要であるとも言われている(文部科学省, 2021a,b)。その上で、特に

配慮を要する児童生徒に対しては、ICT環境整備のため特段の配慮措置を講じる必要がある。児童生徒の学習状況の把握や家庭学習を課す際には、生徒の家庭の通信環境を把握し、環境を整えた上でICTを最大限活用することが必要であるとされている(文部科学省, 2020b)。

文部科学省(2020c, 2021c)において報告されている配慮の事例として、各家庭のネット環境の調査、教員への研修やマニュアルの作成等が行われているが、実際に学校でオンライン授業を行う際に教員が行うべき配慮事項や授業のメリットや課題はどのような点にあるかは不明確なままである。そこでまず、オンライン授業にあたっての配慮や準備についての先行研究を概観する。

学校によっては、ICT環境が整っているところもあれば、環境の整備から開始しなければならないところもある。荒井ら(2021)においては、ICT環境の準備がなかったために生徒のICT環境調査と準備に充当せざるをえなかったと報告している。しかし、環境が整っているとしても課題はある。香川ら(2021)によれば、オンライン授業は高学年では比較的行いやすいものの、ICTの機器に慣れていく過程の中学年や機器の操作に慣れていない低学年では様々な工夫を要することが示されている。また家庭でオンライン授業を受講する場合は、保護者との連携が欠かせない。

オンライン授業のデメリットや課題に関しては、大井ら(2021)や香川ら(2021)、米満ら(2021)が指摘している。様々な教材がWEB上で公開されたが、多くの教材提供サイトでは学習指導要領に則った「主体的・対話的で深い学び」に繋がる教材開発や授業設計は十分に

* 兵庫県立視覚特別支援学校

令和4年7月13日受理

** 兵庫教育大学大学院学校教育研究科特別支援教育専攻障害科学コース 教授

示されていない。したがって、良いコンテンツが公開されても、教師や児童生徒はそれを実際の学習に活用しづらいという課題がある。またオンライン授業のデメリットには、ネット環境の問題、議論する際に場の空気が読みたい、オンデマンド型授業において、生徒のやる気が減退した際の学習の遅れ、生徒への連絡を使用しやすいものにしてほしいという教員の要望もある。

生徒が感じるデメリット(相場,2021)では、ネットの不具合、すぐに質問ができない等があり、保護者が感じるデメリット(拝田ら,2021)では、テンポについていけない際にわからないところが放置されてしまう、画面の見づらさ等が報告されている。

オンラインでは、デメリットや今後の課題が多い一方でメリットも多数ある。例えば、環境の問題が解決すれば、双方向でのコミュニケーションが可能になる。ICTを活かし、様々な工夫をしながら授業が行われている。例えば、情報端末、電子黒板、デジタル教材などを授業において効果的に活用することにより一斉授業では得られないさまざまな効果を期待することができ、「一斉学習」、「個別学習」、「協働学習」にICTを組み合わせて理解が深まる授業が期待される(宮崎,2021)。

生徒が感じるメリット(阿部ら,2021;相場,2021)では、リアルタイムで質問ができる、繰り返し学習ができる等があり、保護者が感じるメリットについて拝田ら(2021)は、親が内容を把握できるといったことを指摘している。

2. 視覚障害者のオンラインのアクセス

オンライン授業のスタイルには、教員と生徒がオンラインを同時に接続して授業を行う方式と、資料や動画を各自が閲覧して学習を進めるスタイルがある。視覚障害の有無に関わらず、リアルタイムでの配信、動画や資料の提供など、複数の方法で授業を行うことが求められると考えられる。

視覚障害者がオンラインを使用する場合、音声ガイドが必要となる場合がある。オンライン授業の困難として佐藤(2021)は、画面共有や言葉の説明だけでは十分な理解が得られているかの確認が難しく、学生の手元に点字資料や拡大資料をすぐに用意できないといった課題のあることが報告されている。オンライン授業を開始するにあたっては、生徒や保護者への様々な配慮、教員への研修の充実など、多くの取り組みが必要となる。対面授業と比較すると活動の制限が多くあったり、個人の環境により受講困難な場合もある。しかしこれらの研究は障害のない学生や保護者、教員を対象としており、視覚障害教員がオンライン授業を運営する場合に、対面と比較して授業の準備には、これまで以上に時間が必要になるなどの困難さがあると思われる。

オンラインのメリットとして、生徒がどこからでも参加することが可能であり、個人のペースで学習が可能となり、繰り返しの学習が可能となり、課題が課されることで復習に繋がるといったことがある。一方で、視覚

障害教員からオンライン授業を受ける生徒は、きちんと授業が成り立つのかという不安、質問がしづらくなることで授業の理解が浅くなるといったデメリットが予想される。そこで本研究では、視覚障害教員がオンライン授業を展開するにあたり、感じるメリットやデメリット、今後の課題解決に向けて行っていくべきこと等を明らかにすることを目的とする。

II 方法

1. 対象者と調査方法

本研究の対象者は、通常学校や視覚特別支援学校に勤務する視覚障害教員4名である。

本調査は、対象者の基本情報やオンライン授業の経験等に関する基本事項に関する事前調査と、それをもとにしたインタビュー調査の2つで構成される。事前調査では、教員の基本情報、オンライン授業経験の有無、授業のメリットやデメリット、今後の課題解決に向けて行っていくべきこと等について回答を求めた。インタビュー調査では、事前調査で得た回答をもとに筆者が更に詳細に回答を得たい内容について質問を行った。

2. 事前調査

事前調査では、調査対象者の基本情報、オンライン授業経験の有無など14項目についてメールによる調査を3名に行って回答を得た。1名は、事前調査の質問項目もインタビュー時に合わせて回答を得た。

事前調査の項目は、相場(2021)を参考に作成し、筆者と第二筆者が協議の上で決定した。

3. 事前調査項目

事前質問項目は、以下の14項目であった。

- 【質問 1】 現在、授業を担当している学年
- 【質問 2】 担当の授業や専門教科
- 【質問 3】 これまで担当した経験のある学校、障害種別、学年
- 【質問 4】 オンライン授業経験の有無
- 【質問 5】 オンライン授業が行われない理由
- 【質問 6】 オンライン授業について暗黙者の教員は行っているかどうか
- 【質問 7】 オンライン授業を行うとして想定されるメリットとデメリット
- 【質問 8】 オンライン授業で使用しているシステムやソフトウェア
- 【質問 9】 システムやソフトウェアの使用が可能となるまでの準備にはどんなことが必要であるか
- 【質問 10】 オンライン授業でのメリット
- 【質問 11】 オンライン授業でのデメリット
- 【質問 12】 オンライン授業を行う場合、対面授業に加えて必要となる指導上の工夫
- 【質問 13】 オンライン上での生徒との関わりにおける困難点や工夫点
- 【質問 14】 オンライン授業についての今後の課題と課題

解決に向けて行っていくべきこと

4. インタビュー調査

事前調査の回答をもとに、インタビューによって更に詳細な回答を得た。

インタビューに使用する通信手段は、事前調査の回答に基づいて対象者の利便性に応じ、フェイスタイム、ライン通話、電話を使用した。インタビュー音声は、対象者の了承を得て、ICレコーダーで録音を行った。

調査実施期間は、2021年9月12日から9月25日であった。

5. 倫理的配慮

対象者に対して、研究テーマ、データの使用目的などについて文書にて説明し、同意を得た。

Ⅲ 結果

1. 調査対象者の基本情報

本研究の対象者は、視覚障害のある教員4名で、対象者のプロフィール情報を表1に示す。

2. 事前調査の結果

以下には、事前調査の質問5から14までの回答を以下に記述する。

質問5から7はオンライン授業未経験者の回答で、質問8から14はオンライン授業経験者の回答である。

(1) 質問5：オンライン授業が行われない理由（オンライン授業未経験者）

- ・生徒の実態に応じてオンライン授業を検討し、教師間での研修を行っているが、各家庭のネット環境の状況の違い、生徒の操作技術の差がある。
- ・一人で操作するのが難しい、オンライン授業とリアルな生徒とのバランスのとり方が難しい、直接指導

が必要な盲学校では、メリットを感じない、児童生徒の反応を捉えづらい。また、音楽の授業となると、児童生徒の家の環境によっては、音を出す活動が難しい場合があり、できる活動が限られてしまいがちである。

(2) 質問6：オンライン授業について、晴眼者の教員は行っているか（オンライン授業未経験者）

- ・行っていない。

(3) 質問7：オンライン授業を行うとして、想定されるメリットとデメリット（オンライン授業未経験者）

- ・メリット：休校等の際、生徒たちの学習保証の時間を確保できること、学校生活と同じような生活リズムを意識させることができる。
- ・デメリット：生徒一人では操作しながら、授業を受けたり、課題を進めることが難しい、点字使用の生徒の場合、適切にノートや課題に取り組んでいるかの確認が難しい。
- ・困難点は、資料提示の仕方（画面共有など）、生徒に挙手ボタンを上げさせるなどの、視覚による判断の難しさである。工夫点は、オンライン上で生徒同士話をさせる、ペアの先生の様子を見てもらう、役割分担をはっきりさせることである。対面と同じ分量の授業を行うことが困難である。そのため、少し少ない時間で終わられる内容を計画する。そして、視覚を必要とする生徒の反応などについては、TTの教員に事前にサポートを依頼する。機器を介してのやりとりのため、児童生徒が授業者の説明を理解できているかが分かりづらい。そのため、質問があるか、理解できているかなどを適宜授業者から聞くようにしている。

表1 対象者のプロフィール

	学校種別	現在、授業を担当している学年	担当の授業や専門教科	これまで担当した経験のある学校、障害種別、学年	オンライン授業経験の有無
教員A	中学校	中学1年	英語	高校(半年)、公立中学2校(1年生～3年生まで経験)	現在行っている。
教員B	視覚特別支援学校	単一障害教科は、高校1年現代社会、高校3年日本史、高等部自立、高等部総合・特別活動 重複障害クラスでは、生活、国語、数学、英語、音楽等	高等学校公民科	視覚特別支援学校(盲学校)、単一障害、重複障害(中学部・高等部)	経験なし
教員C	視覚特別支援学校	小学部1年	国語、算数、生活科、音楽、自立活動	視覚特別支援学校と通常小学校。学年は、1,2,3,4,6年。	特別な行事や他校との交流で実施
教員D	視覚特別支援学校	小学部6年、中学部1年	音楽	普通高校第1学年、盲学校小学部6年、中学部1～3年	1度経験したことがある

- (4) 質問8: オンライン授業で使用しているシステムやソフトウェア (オンライン授業経験者)
- ・システムは、google meet を使用。オンライン授業は、コロナ不安によって登校したくない生徒と、不登校の生徒が利用している。数としては学年によるが利用している人数に違いはあり、対象者の担当するクラスでは、1クラスに2~5人程度である。オンライン授業は始まってまだ数日しかたっていない。システムは Zoom を使用。システムは FaceTime (iPad) を使用。
- (5) 質問9: システムやソフトウェアの使用が可能となるまでの準備 (オンライン授業経験者)
- ・システムやソフトウェアを一人で使いこなすのは困難があり、周りの人のサポートが不可欠である。上記のことを前提に必要となることは、晴眼者に教えてもらい、役割分担をはっきりさせる、研修などの3点である。晴眼者に教えてもらうことに関しては、職場ですでに機器の扱いに慣れている人に、教えてもらうことが大事である。一人でやりかたを覚えたりするのは、難しいと感じている。役割分担をはっきりさせることに関しては、晴眼者に教えてもらったとしても、晴眼者ではないとできないこともたくさんある。例えば、写真の資料のアップや、オンラインの生徒とのやりとりはどうしても目の見える人に頼んだほうが、スムーズであると感じている。研修に関しては、晴眼者ベースに研修は進んでいくため、視覚障害者にとっては、置いてきぼりになるのは必然である。以上のことから、システムやソフトウェアの扱いに慣れるまでの時間はどうしてもかかることになる。資料を写真にとって、オンラインの生徒に資料をあげることは度々あることであるが、困難なため、サポートの教員に依頼している。現在のサポートの教員が機器の扱いに慣れているが、今後おなじような環境になるとは限らない。そのため、サポートの教員の人柄や能力に関わる内容である。視覚障害当事者同士で研修会を行い、音声で使用できる人を増やしていった。iPad の整備。
- (6) 質問10: オンライン授業のメリット (オンライン授業経験者)
- ・学校側と対象児童生徒のインターネット環境の整備
 - ・不登校生徒との関わりがもちやすい、個別対応が声のみでも可能、不登校や病気の子どもには良い、登校して授業を受けることが難しい場合でも、教師とリアルタイムでつながって学習に取り組むことができる。
- (7) 質問11: オンライン授業のデメリット (オンライン授業経験者)
- ・オンライン授業とリアルの生徒とのバランスのとり方が難しい。
- ・直接指導が必要な盲学校では、メリットを感じない。
- (8) 質問12: 対面授業に加えて必要となる指導上の工夫 (オンライン授業経験者)
- ・空白の時間をできるだけ少なくする。
 - ・対面授業の生徒に課題を与えている間に、オンラインの生徒に指示をする。
 - ・提示している資料を見やすくするために画面共有にする。
 - ・他校との交流を行う場合、ネット環境によるタイムラグがある。その上、他校の生徒の実態把握、各校の教員の思いに適した授業の綿密な計画が必要なため、話し合いややりとりの時間の捻出が必要である。
 - ・サポート教員と綿密に打ち合わせをして、教材の提示方法、児童生徒の様子への理解に向けた方策、機器操作におけるサポートの必要性などを確認することが必要となる。
- (9) 質問13: オンライン上での生徒との関わりにおける困難点や工夫点 (オンライン授業経験者)
- ・困難点は、資料提示の仕方 (画面共有など)、生徒に挙手ボタンを上げさせるなどの、視覚による判断の難しさである。
 - ・工夫点は、オンライン上で生徒同士話をさせる、ペアの先生の様子を見てもらう、役割分担をはっきりさせることである。
 - ・対面と同じ分量の授業を行うことが困難である。そのため、少し少ない時間で終えられる内容を計画する。そして、視覚を必要とする生徒の反応などについては、TTの教員に事前にサポートを依頼する。
 - ・機器を介してのやりとりのため、児童生徒が授業者の説明を理解できているかが分かりづらい。そのため、質問があるか、理解できているかななどを適宜授業者から聞くようにしている。
- (10) 質問14: オンライン授業についての、今後の課題と課題解決に向けて行っていくべきこと (オンライン授業経験者)
- ・課題は、授業の質の担保、人的サポートの不足、保護者の期待がある。
 - ・現状、オンライン授業とリアルでの対面授業の質は同じとはいえない。オンライン授業の生徒に声をかけている間は対面授業で受けている生徒に対してのケアができない。
 - ・晴眼者でもオンライン授業については、現在も悪戦苦闘の様子がある。そのため、視覚障害者一人では困難を伴う。
 - ・現在、はじまったばかりのオンライン授業に対し、保護者・生徒ともに対面授業と同じ質の授業を受けられると考えているが、現場はまだ追いついていな

い。

- ・課題解決に向けての方策は、サポート教員の必要性、教員自身の情報機器の取り扱いの向上、学校としての体制づくりにある。
- ・多くの研修の機会の中でオンラインに慣れる練習を行うことが重要となる。システムはアップデートがしばしば行われるため、その度に構造の把握、知識を得ることに努める必要がある。そして、知識を持ち、スキルを高めた上で、サポートを受けたい部分がどこにあるのかを把握しておくことが望ましい。
- ・音楽の授業におけるオンラインでの活動幅がどのようにしたら広がっていくか（できることが増えるか）を模索していくことも必要であると感じている。

3. インタビュー調査の結果

(1) 分析方法

ICレコーダーで録音したインタビュー記録から、筆者が、逐語録の作成、逐語録からのカテゴリーの生成、発言を調査対象者ごとに分類を行った。分類の結果について特別支援教員を専門とする大学教員1名と大学院生1名と協議した上で決定した。分類の方法は、質問項目ごとを基本に行った。

(2) カテゴリーの種類

逐語録をもとに、筆者と第二筆者が協議をすることで以下の11個のカテゴリーが生成された。カテゴリーの名称は以下の通りである。

- ①オンライン授業の実施
- ②授業の困難さとその対応・工夫
- ③オンライン授業のメリット
- ④工夫
- ⑤研修
- ⑥ネット環境
- ⑦今後の課題
- ⑧視覚障害教員と健常の教員の相違点
- ⑨音楽の代替活動
- ⑩視覚障害教員の心構え
- ⑪健常の教員への思い

(3) 各カテゴリーでの具体的な発言内容

ここでは、インタビュー調査対象者を区別せずに、各カテゴリーに含まれる発言内容を一括して示す。

- ①オンライン授業の実施
 - a. オンライン授業前は、生徒は対面で授業に出席しており、コロナ不安で欠席していた生徒はほとんどいなかった。
 - b. オンライン授業のシステムは、最も使用しやすいゲーグルミートを使用している。
 - c. スクリーンリーダーやボイスオーバーを使用している視覚障害者にとっては、システムによって使用のしやすさに差があると考えられる。

- d. オンライン授業を受けている生徒と対面で授業を受けている生徒がいる場合、どちらにも気を配ることは困難であるが、対面の生徒に通常通りに授業を行う一方で、ペアの教員がオンラインの生徒への声かけを行うといった連携がある。
- e. オンラインの生徒にも発言させることで、対面の生徒が、オンラインで受講する生徒も授業に参加しているということの自覚を持つことが可能となる。
- f. 現在、オンライン授業はされていないが、今後、導入の可能性が考えられている。
- g. ギガスクールにより、パソコンやタブレット等を使用した学習が推進されている。そのため、まずは教員が使い方、受け方の知識を身につけ、授業に繋げていこうと取り組んでいる。

②授業の困難さとその対応・工夫

- a. 対面とオンラインの生徒どちらにも気を配ることの困難があり、授業では対面の生徒が重視される。その上オンラインの生徒は見づらいという困難もある。
- b. オンラインの生徒が挙手していてもわからない、画面の見やすさに関する事等、視覚を必要とすることは、ペアの教員と連携して指導を行っている。
- c. デジタル教科書の使用やペアの先生のサポートにより授業を行うことが可能となる。
- d. サポートの教員が配置されているが、今後、環境が変化した場合、人的サポートがきちんと受けられるのかはわからない。
- e. サポートがつくことは、合理的配慮における必要な調整であると考えられる。
- f. TTで授業を行っている。
- g. 見えにくい生徒の様子を伝えてもらうことなど、サポートを依頼したい場合は、事前をお願いをしている。
- h. 突然の休校に、オンライン授業準備のための研修を行う暇がなかった。
- i. システムを使用する際は、操作など、健常の教員にサポートを依頼した。
- j. サポートの教員がいても、画面越しでは、生徒の反応が捉えづらい。また、教員の指示が伝わっているのかわかりにくい。
- k. 生徒に声を出させることで、状況を把握する。

③オンライン授業のメリット

- a. オンライン授業のメリットとして、学校に来づらい生徒も授業に参加することが可能であると事前回答を得た。オンラインを通じて、生徒と繋がることができると言う。
- b. 今後、他校との交流でオンラインを活用する。
- c. 直接の指導が必要な視覚特別支援学校においては、あまりオンライン授業のメリットを感じないと言う。

④工夫

- a. すべてを一人でこなすのではなく、保護者との連携、健常の教員のサポートを受けている。
- b. 保護者の協力も得ながら、子どもに何が必要なのかを考えている。
- c. 授業を行うには、複数のスクリーンリーダーの使用に慣れておくことが望ましい。
- d. 複数の学校でのオンライン交流の場合は、お互いの学校の生徒のニーズも把握しておかなければならない。
- e. オンラインで他校の教員が話し合い、授業の計画を組み立てる。

⑤研修

- a. オンラインのシステムを使用可能にするよう、研修が行われている。しかし、写真を選択する必要がある時点で、音声ユーザーには実践が困難である。
- b. ギガスクール支援員の方が学校に来て、研修を受けている。
- c. 教員間で、生徒側と教員側に分かれて模擬授業を行っている。
- d. 視覚障害団体の当事者が集まって、システムを使用可能にするための研修を行った。その中で、音声で操作できる人を増やしていった。

⑥ネット環境

- a. ネット環境が家に整っているのが重要になる。
- b. アイパッドは整備されているが、教員とのやりとりなどにしか使用していない。
- c. 授業を行うにあたり、各家庭にネット環境が整っているのを確認後に授業を開始した。

⑦今後の課題

- a. 視覚障害教員がオンライン授業を一人ですべて行うことは、困難があったり、大きな労力となることがある。
- b. サポートの教員がいることで、視覚障害教員は授業に労力をかけることが可能となる。しかし、サポートを充分に受けるには、周囲の理解と時間的余裕が必要である。
- c. オンライン授業のための研修は、視覚障害学生にはサポートをする場所があるが、教員は自助努力によるところがまだまだ多いのではないだろうか。
- d. 合理的配慮として、サポートが行われることが求められるだろう。

⑧視覚障害教員と健常の教員の相違点

- a. 視覚障害教員より、健常の教員の方が、システムに慣れる、オンラインに取り組めるスピードが早く、周りへの気配りもできると感じている。
- b. オンラインに関しては、機器に慣れていない健常の教員もいたと言う。
- c. 子どもや保護者、晴眼の教員と関わる際、教師としてではなく、視覚障害という立場で関わることを大切にしている。周囲の教員との意見の相違はあるものの、

自分に障害があるからこそ、生徒と同じ目線に立つことができる。

- d. 当事者としての目線に立つことで、視覚障害のある生徒の生活の広がりにつながったという声をもらったこともあった。
- e. 視覚障害のある教員がいてよかった、頼りにしたい存在になればと考えながら、日々指導にあたっている。見えないことで、子どもと関わるのが困難な点もあるが、自分ができること、例えば、子どもたちが楽しめるゲームなどは自分が担当となって考えるなど、自分にできることを探すことはできると言う。
- f. 健常の教員でも、家庭や自身の事情など、それぞれ異なるため、健常の教員との違いはあるものの、教員としては同じだと考えている。
- g. 見えることの経験がないことで、どのようにすれば見えやすいのかはわかりにくい。しかし、その部分は健常の教員にサポートを受けながら、また、経験を積むうちに、どのようにすれば見えやすいのかもわかるようになってきている。
- h. 有利になる部分は、聴覚中心に情報を得ているため、どのように話せば伝わりやすいかを考えることで、確実に伝えることを心がけている。

⑨音楽の代替活動

- a. 生徒の家庭環境によっては、実技で音を出す活動に制限があった。そのため、実技の代りの活動として、楽譜を見て理論的な活動に変更された。
- b. 今後は、オンラインでも可能な音楽活動を模索していく必要がある。

⑩視覚障害教員の心構え

- a. オンライン授業を行う側の経験がまだないため、サポートを受けていると感じる場面は少ない。
- b. 点字使用の生徒を指導する際は、読み速度等、実態が異なるため、生徒にどれほど伝わっているのかは課題となる。
- c. 生徒のニーズに合わせて、視覚障害があるからこそ情報提供をできることがある。
- d. デバイスの使用等、子どもの方が知識を有している場合もあるため、一緒に学んでいくことを大切にしている。
- e. ペアの先生のサポートが必要な場合、察して何でも手伝ってもらうのではなく、自分から必要なことは依頼する。何でも健常の教員に任せてしまうと、仕事なくなることにも繋がりがかねない。

⑪健常の教員への思い

- a. 授業での役割分担をはっきりさせて業務にあたる。
- b. 周囲からのサポートを受けるには、時間的制約が大きいと考えられるが、周囲の人間性に助けられていると感じると言う。
- c. 教員には、常に学び続ける姿勢が必要であるが、視覚

障害に関しての知識に乏しい教員もいると言う。

- d. 学校という組織で勤務する上で、不満な思いをうったえる難しさがある。

IV 考察

1. 視覚障害教員に対する合理的配慮

業務を行う上での困難としては、視覚障害者の限界、サポートを受けるために合理的配慮が必要であること、環境が変化した場合、同じサポート内容で勤務できるとは限らないといった発言があった。しかし、授業や他の業務で困難に直面したとしても、工夫を行いながら勤務していることが明らかになった。それは、役割分担をはっきりさせることである。授業は視覚障害教員が、生徒の様子の把握やオンライン機器の操作等はサポート教員が行うという役割を決めることで、スムーズな授業運営、生徒にきちんと目を配ることが可能となる。その結果、視覚障害教員は授業に集中することができるため、質の高い授業を行えるのではないかと考えられる。

一方で視覚障害があるからこそ、生徒と同じ目線に立つことができる、視覚障害教員がいることで、頼りにしたいと思われる存在でありたい、聴覚をいかし、言葉で伝えることを大切にしている等の発言もあった。このことより、通常の授業やオンライン授業の困難さはもちろんであるが、障害受容の困難さも重なり、今後、環境が変化してもスムーズにサポートが受けられるよう、視覚障害者だけが努力するのではなく、周囲も障害の有無に関わらず、勤務しやすい環境について、ともに議論することが求められるのではないだろうか。

2. カテゴリーごとの特徴

本研究では、事前調査の回答とインタビュー調査の逐語録より、11のカテゴリーが生成された。以下より、カテゴリーごとの特徴について考察を行う。

カテゴリー1「オンライン授業の実施」では、ギガスクールが推進されている上、新型コロナウイルスが流行している昨今、通常学校や視覚特別支援学校の種別に関係なく、オンライン授業が行われていると予測していた。しかし、通常学校ではオンライン授業が行われていたが、視覚特別支援学校では、行われていなかったり、特別な行事の際に行う、今後検討するという結果であった。

視覚障害のある児童生徒には、対面での指導が行われることも必要であるが、オンライン授業を導入することが可能となれば、登校が困難な児童生徒も授業を受けることが可能となる。その上、生徒は、機器の操作が可能となることで、教員は、児童生徒の興味に応じた教材の提供が容易にできると考えられる。機器の操作が可能となる上、興味に応じた教材での学習が可能となれば、生徒にとって、情報の入手が容易になる、学習意欲が向上するなど、オンラインのメリットが多くなると考える。

カテゴリー2「授業の困難さとその対応・工夫」では、オンライン上で生徒への目配りの困難さ、生徒の様子の

把握の困難さ等が明らかとなった。しかし、困難が伴ったとしても、サポートの教員に様子を伝えてもらう、生徒に声を出させることで状況を把握するといった工夫が行われていた。

カテゴリー3「オンライン授業のメリット」では、メリットとして、学校に来づらい生徒も授業に参加することが可能であると事前回答を得た。一方、直接の指導が必要な視覚特別支援学校においては、あまりオンライン授業のメリットを感じないという発言もあった。

カテゴリー4「工夫」では、視覚障害教員の心構えのような発言もあった。授業において、サポートの教員と連携して指導を行うことが必要だが、視覚障害教員自身もスクリーンリーダーを複数使用できるように操作に慣れておくこと、子どものニーズを把握するために保護者との連携や他校の教員との話し合いの場の設定が重要であることが明らかとなった。

カテゴリー5「研修」では、まだまだ健常者が理解できるように作られた内容であることが明らかとなった。研修を進めるにあたり、配慮内容や方法について相談できる環境や、当事者間の情報共有が可能であればよいが、自助努力で慣れていかなければならない境遇にいる教員も多いのかもしれない。対策として、視覚障害教員が機器を操作する上で困難になる点をもっと周囲が理解し、視覚障害者の理解をベースにした内容が作られることが求められるだろう。

カテゴリー6「ネット環境」では、家庭に環境が整っているのが重要となることが明らかとなった。他校との交流でオンラインを使用する場合、家庭と同様に、ネット環境の問題がおきることが今後の課題となるだろう。

カテゴリー7「今後の課題」では、視覚障害教員がオンライン授業を一人ですべて行うことは、困難があったり、大きな労力となることがあることが明らかとなった。その上、オンライン授業受講のために、視覚障害学生にはサポートをする場所があるが、教員は自助努力によるところがまだまだ多いのかもしれない。サポートの教員がいることで、視覚障害教員は授業に労力をかけることが可能となるが、サポートを十分に受けるには、周囲の理解と時間的余裕が必要である。

カテゴリー8「視覚障害教員と健常の教員の相違点」では、困難な面としては、視覚障害教員より、健常の教員の方が、システムに慣れる、オンラインに取り組めるスピードが早く、周りへの気配りもできるという発言があった。そして、子どもと関わる際の困難も明らかとなった。しかし、健常の教員全員がオンラインに慣れているわけではない、健常の教員も家庭や自身の事情等、状況がそれぞれ異なるため、障害の有無に関わらず同じであるとの発言もあった。

カテゴリー9「音楽の代替活動」では、音楽だからこそその困難点が明らかとなった。音楽での歌唱や器楽などのすべての活動を行うためには、音を出すことが必要となる。しかし、家庭環境によっては、活動が困難な場合

があった。その際には、理論的な活動に置き換える工夫が行われていた。

本研究では、オンライン授業において、音楽の活動に制限があったが、音楽だけではなく、体育や理科といった実技や実験が必要な授業については、課題改善の方法について模倣していく必要があると考える。

カテゴリ 10「視覚障害教員の心構え」では、視覚障害教員がどのような点に注意しながら勤務しているのかが明らかになった。サポートを依頼したい際は、事前に打ち合わせを行うことが必要である。また、子どもに教育を提供するだけでなく、子どもの方が知識を有している部分については、一緒に学んでいくことも心構えの一つである。

カテゴリ 11「健常の教員への思い」では、周囲の人間性に助けられているという発言があった一方で、視覚障害に関する知識に乏しい教員もいるという発言もあった。教員として常に学び続ける姿勢が必要であるが、視覚障害教員も含めたすべての教員の事情や時間の捻出をどのようにしていくのかが今後の課題となるかもしれない。

3. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、オンライン授業が推奨される現場の中で勤務する視覚障害教員への事前質問調査とインタビュー調査を通して、オンライン授業の現状、今後の課題の解決に向けて行っていくべきこと等が明らかとなった。視覚障害の程度に関わらず、もっと簡単にオンラインが活用可能となれば、学校で授業を受けることが困難な生徒や重度障害の人であっても、健常者と変わりなく授業が受けられると考えられるだろう。オンラインのメリットが多くあった一方で、視覚障害教員にはバリアがまだまだ存在していた。通常の授業に加え、生徒の反応が更にわかりづらくなること、課題や授業への取り組み状況の把握のしにくさから、更にサポートを求めなければ成り立たない場面が増えたのかもしれない。しかし、健常の教員でも慣れるのに時間が必要であったり、より綿密な授業計画を立てることが必要になるために、時間の捻出がより一層困難になることから、視覚障害教員は更にサポートを依頼しづらくなっているのかもしれない。そのため、教員同士の助け合いのみで対応するのではなく、視覚障害教員の業務補助を行うサポーターを置くことも検討する必要があると考える。

本研究では、通常学校や視覚特別支援学校に勤務する視覚障害教員を対象にした。しかし、教員のニーズは様々であるため、今後の課題は、より多くの事例を収集する必要がある。その上、理療科の教員や、他教科の教員についても、現状を把握していく必要があると考えられる。加えて、勤務が可能となるよう、自助努力のみで補おうとするのではなく、視覚障害教員が研修を受けること、自らが行うこともできる場所が開かれることが喫緊の課題であると考えられる。

引用文献

- 阿部雄太, 荒納郁美, 北野真理恵, 真木啓生 (2021) What we have done - English lesson under the situation of social distancing -. 高校教育研究 .72.33-43
- 相場博明 (2021) オンライン授業の類型化と教育効果の予察的考察 :-GIGA スクールがほぼ実現している私立小学校と私立大学での実践を通して -. 教育実践学研究 .24 (0) .37-50
- 荒井雅子, 高橋竜太郎 (2021) 2020 年度高校3 年生世界史のオンライン授業実践 (<小特集>オンライン授業実践の記録) . 教職研究 .35.1-11
- 拝田清, 吉野康子, 山崎千春, 鹿住尚子 (2021) Web 会議システム (Zoom) を利用した同時双方向遠隔教育の試験的実践 . 和洋女子大学紀要 .62.167-177
- 香川貴志, 原田勝之, 桑名良幸, 北村慎朗, 高橋詩穂, 江川眞美, 二谷和恵 (2021) COVID-19 (新型コロナウイルス感染症) 拡大による臨時休校措置の解除後における小学校教育の始動過程 : 京都教育大学附属桃山小学校の場合 . 教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要 .3.85-94
- 宮崎智絵 (2021) ICT 活用教育と高校教科「情報」における情報倫理教育 . 立正大学教職教育センター年報 .2.61-73
- 文部科学省 (2020a) 「教育の情報化の手引 - 追補版 - (令和2 年6 月)」: https://www.mext.go.jp/content/20200608-mxt_jogai01-000003284_002.pdf (2021 年11 月28 日閲覧)
- 文部科学省 (2020b) ICT の積極的な活用による「学びの保障」について https://www.mext.go.jp/content/20200609-mxt_syoto01-000007788_4.pdf (2021 年11 月28 日閲覧)
- 文部科学省 (2020c) 小中高等学校における ICT を活用した学習の取組事例について (令和2 年5 月26 日時点) https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf (2021 年11 月28 日閲覧)
- 文部科学省 (2021a) 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～ (2021.11.22 Ver.7) https://www.mext.go.jp/content/20211122-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf (2021 年11 月28 日閲覧)
- 文部科学省 (2021b) 新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン https://www.mext.go.jp/content/20210219-mxt_syoto01-000007775.pdf (2021 年11 月28 日閲覧)
- 文部科学省 (2021c) 新型コロナウイルス感染症による臨時休業に伴いやむを得ず学校に登校できない児童生徒に対するオンラインを活用した学習指導に関する事例 (令和3 年2 月19 日) https://www.mext.go.jp/content/20210219-mxt_kouhou01-000004520-01.pdf (2021 年11 月28 日閲覧)
- 大井将生, 渡邊英徳 (2021) ジャパンサーチを活用したハイブリッド型キュレーション授業 : 遠隔教育の課題

を解決するデジタルアーカイブの活用. デジタルアーカイブ学会誌 .4 (s1) .s69-s72

佐藤北斗 (2021) オンラインでの情報機器操作に関する授業の実践報告—Zoom を利用する際の指導のポイントと課題—. 視覚障害教育ブックレット Vol.47'21 年度 2 学期号 . ジアース教育新社 .40 ~ 46

米満潔, 古賀崇朗, 永溪晃二, 町田正直, 高崎光浩, 堀良彰, 山内一祥, 和久屋 寛 (2021) COVID - 19 対策として授業のオンライン化推進を目的とした FD 活動の実践と評価. 佐賀大学全学教育機構紀要 / 佐賀大学全学教育機構 [編].9.65-81